

紀州須川家 ゆかりの人へ

改訂 令和4年6月



南方 熊楠(みなかた くまぐす)
慶應3年(1867)和歌山生まれ、20歳より13年間、米国と英国で過ごした。

明治33年(1900)帰国、その後、那智山周辺で3年間の野外研究を経て、田辺に移る。紀州の博物、生物、民俗学者として多角的、科学的活動を行う。エコロジーの先駆者。



「南方熊楠全集」6に大正14年(1925)、熊楠が口述した「紀州須川家」の文が掲載されております。この内容は熊楠と親交のあった大和地方史研究家杉田 定一氏の調査に基づく内容でした。この記載が紀州須川家のルーツ探しにとっても助けになりました。

この記述に基づく先祖研究は単なる親類縁者の話ではなく、史実として客観性を持ち、その時代、地域を生きた人間のストーリーです。

昔々の先祖の話

須川家は、13世紀初頭(鎌倉時代)、大和の国、奈良の荘園を創始として興福寺、春日神社、東大寺などに材木を納める「箕川」*でした。多門院日記(歴史資料)によれば、天文12年(1543)、須川城で須川 長兵衛藤八は10倍の筒井勢と戦い討ち死にしています。

太閤検地などで大和の土豪勢力は国を追われ、浅野氏の時代、熊野に移転しました。

寛永7年(1630)、17世紀初頭、庄屋 須川 長兵衛は徳川家代官から山林600町歩の安堵を得た記録があります(先祖来の古文書)。そして、江戸期250年間、熊野で山林業を営む長兵衛家(18世紀以降は長右衛門家)として畝畑、中平、モチノ木で存続しました。家紋は五三の桐、宗派は臨済宗です。大和より移住した須川は、忠兵衛(請川大庄屋)、郡兵衛などがいました。 *川をせき止める意味。

記憶にある人々の話

第2次世界大戦をはさんでの父方 須川 長右衛門家と母方須川 久彦家の人々の話。私の祖父や祖母、おじやおば達の各々の記憶です。久彦家は20世紀初頭より朝鮮半島で生活、各々の仕事がありました。

昭和20年8月15日、紀州湯川に何組にも別れて引き揚げ、また新たな生活を始めました。祖父久彦、祖母生駒とせ、その係累の話です。

調査により、久彦家は文化・文政頃(1820前後)生まれ、26代長右衛門・長七の次男(隠居)「彌吉」を祖としていました。7代前に長右工門家から分家した一族でした。

およそ400年間は大和、400年間は熊野、長い家族の歴史です。須川家の生業は大和から熊野まで林業でした。日本は森林の国。森林は材木自体も製品の紙も、そしてCO₂対策にも未来の産業であることに間違いありません。



須川 藤八討死



熊楠先生の発見



「箕川」は須川



「はる糸」の嫁入り



久彦の米つくり



久、北から脱出

多くの方々のご協力を得てまいりましたが、まだ不明な点、理解できない事実などが多くあります。

全ての記載を論理的、科学的にしたいと思えます。以下HPをご覧ください、関係する情報をお持ちの方、ご連絡をお待ちしております。



須川家ゆかりの人へ

検索

← スマホでも見られます。



【連絡先】

須川 薫雄(しげお) E-mail
sugawaweapons@aol.com